

WHAT'S NEW? —リニューアルあれこれ—

- 日時：** 2011年5月7日（土） 10時～16時 （9：40受付開始）
会場： 国立新美術館講堂（〒106-8558 東京都港区六本木7-22-2）
アクセス <http://www.nact.jp/information/access.html>
主催： 美術史学会、国立新美術館
後援： 全国美術館会議、文化資源学会、日本アートマネジメント学会
定員： 260名（美術史学会員以外の参加も可、参加無料、事前申込不要、先着順）

開催趣旨：

近年、著名な私立美術館や公立の博物館・美術館があいついでリニューアル・オープンを遂げました。施設の老朽化や昨今の展示方法など様々な問題から新たな博物館・美術館へと変貌いたしました。また国立を含め新たにオープンした施設や、リニューアル計画が進行中の施設も出てまいりました。

そこで美術史学会美術館博物館委員会ではリニューアル・オープン、またはニュー・オープンを遂げた学芸員によって、展示施設を始めとしたハードな面と展示そのものや来館者へのサービスなどソフトな面の両面から興味深い報告を行ってまいります。その後、パネル・ディスカッションによって討論および意見交換を行います。外側からでは気がつかない貴重な報告が聞けることと思います。

美術作品をいかに見せるかは美術史における根本的な問題のひとつであり、美術史学会での話題とするにふさわしい重要なテーマと考えます。

プログラム：

10:00-10:10 開会の挨拶 小佐野重利（東京大学 美術史学会代表委員）

10:10-10:40 挨拶および講演 林田英樹（国立新美術館 館長）

10:40-11:10 趣旨説明 泉武夫（東北大学）

総合司会 吉中充代（京都市美術館）

■ 発表 その1（午前）

11:10-11:40 浅湫毅（京都国立博物館 学芸部主任研究員）

「展示館リニューアルは障害物競走のごとし—京都国立博物館平常展示館の
建替え—」

<昼食・休憩>

13:00-13:10 美術館博物館委員会からの諸報告 橋爪節也（大阪大学）

■ 発表 その2（午後）

13:15-13:45 松原茂（根津美術館 学芸部長）

「91回のケース会議」

13:50-14:20 石田佳也（サントリー美術館 学芸部長）

「リニューアルから五年目を迎えて」

14:25-14:55 内山淳一（仙台市博物館 学芸室長）

「こんなに変わった？仙台市博物館」

<休憩>

■ パネル・ディスカッション 「リニューアルの今とこれから」

15:10-16:00

司会：泉武夫

パネラー：平井章一（国立新美術館）、浅湫毅（京都国立博物館）、松原茂（根津美術館）、石田佳也（サントリー美術館）、内山淳一（仙台市博物館）

16:00 閉会

[要 旨]

発表

1. 「展示館リニューアルは障害物競走のごとし

—京都国立博物館平常展示館の建替え—
浅湫毅（京都国立博物館 学芸部主任研究員）

博物館・美術館をつくるということは、新築であるか、リニューアルなのかにかかわらず、さまざまな面で考慮すべき問題が山積しており、大変エネルギーの要るところであろう。とくに京都国立博物館は、「京都」という場所にある「国立」の博物館であることということで、クリアしていかなければならない点はあまりにも多い。それはまさしく障害物競走のごとくである。どこを掘っても歴史的な遺跡・遺物が出てくる「京都」、景観条例の制限が厳しい「京都」、この「京都」の地において、文化財保護の先頭あたりにいることが期待される「国立」博物館として、どのような点が優先されるのか。京都国立博物館はどこまで飛び、そしてどこへ着地できるのであろうか。

2. 「91回のケース会議」

松原茂（根津美術館 学芸部長）

根津美術館は、2009年10月の新創開館に向けて、収蔵庫や展示施設についてのさまざまな調査研究を行った。とくに、展示ケースと照明に関しては、方向性を定めてからもさまざまな場面を想定して議論を重ね、何段階もの模型を作って、その都度細かく検証した。ケースと照明の製作担当者、建築デザイナーおよび学芸員（初期には管理部職員も）からなるケース会議は、ほぼ週1回、都合91回にも及んだ。試行錯誤もあったが、このやりとによって、現場の学芸員の思いが製作担当者に正確に伝わり、結果として使い勝手のよい展示環境ができあがった。工夫したケースの仕様や、全展示ケースに使用したLED照明の有効性について紹介する。

3. 「リニューアルから五年目を迎えて」

石田佳也（サントリー美術館 学芸部長）

サントリー美術館が六本木に移転し、美術館をリニューアルしたのは、2007年春のことである。1961年の東京・丸の内での開館から、1975年の赤坂見附への移

転を経て、都心の範囲内で3度目の移転であったが、今回は、六本木の東京ミッドタウンという都市開発事業と並行して計画が進められたという性格をもっていた。それから4年がたち、5年目を迎えているが、この間に新しい展示環境や照明設備のもとで、さまざまな企画展を開催してきた。今回は、リニューアルによって生じた変化について、ハードとソフト両面にわたって項目を選びながら報告したい。

4. 「こんなに変わった？仙台市博物館」

内山淳一（仙台市博物館 学芸室長）

新館の開館から20余年が経過し、展示ケースの老朽化が進んだ。仙台城跡が国の史跡に指定され、発掘成果を含め仙台城に関わる展示の充実が強く求められるに至ったこともあり、展示室の一部をリニューアルした。工期は平成21年9月から翌22年3月にかけて。今回の改修では、常設展示部分の3室を2室に改編するとともに、各所にパソコンを使っての情報検索システムを設置。展示装置としては、環境省の助成も得て最新のLEDを用いた照明システムを導入した。オープン後も従来どおり季節ごとの展示替を行ってきたが、問題点もないわけではない。そのあたりも含め、リニューアル後に改善された点、あるいはさらに工夫すべきであった点など、実際に展示に携わる者の視点から紹介したい。